

第 225 回 澁澤シティプレイス永代の渋沢栄一像と中村学園の中村清蔵像

筆者：林 久治（記載：2023 年 3 月 5 日）

（1）前書き

私（筆者の林）は [Random Walks（乱歩）](#) という題名で [偏屈老人（林久治）の気促な紀行文](#) のサイトを始めている。私の紀行文では、通常の紀行文にはない、斜め目線からのご紹介を書くことに拘りたいと思います。通常の紀行文に関しては、既に優れたサイトが沢山ありますので、それらをも引用しつつ、ユニークなご紹介を記載することに心掛ける所存です。

一方、私は日本の銅像探偵団 ([1\) のサイト/](#)) の銅像探索に参加している。私は珍しい銅像を探して、探偵団の団長さんに「ギャフン！」と仰っていただけることを目標としている。ここで「珍しい」とは、「①見つけ難い場所に隠れている有名人の銅像。②市井で頑張って人生を過ごしたが、有名人ではない人物の銅像」と言う意味である。私は自宅が東京にあり、孫達が大阪にいますので、主として東京近郊と近畿地方で銅像探索を行っている。最近、私はネット記事を丹念に調査し、そのような「スクープ銅像」の候補を多数見つけている。

武漢肺炎による自粛生活で家に籠っていると、運動不足で体重が増加するし、精神的にも圧迫を感じる。私の銅像探索は不要不急の活動ではなく、私の生存に必要な不可欠である。昨年の 7 月は、第 7 波と猛暑のため、私は銅像探索をしばらく自粛していた。しかし、大阪在住の 3 人の孫達は夏休み前に感染したが軽症であった。そこで、私は 9 月初旬に大阪に行き、近畿の銅像を探索した。東京に帰ってから、運動を兼ねて銅像探索を続けている。私の銅像探索記の全ては、[2\) のサイト/f](#) から閲覧出来ます。

私は 2 月 18 日に飛鳥山公園に行き、渋沢史料館の渋沢栄一像を探索し、その探索記を [222 回の記事/f](#) に記載した。本記事を書く際に、都内で他に渋沢像があるかどうかを検索すると、[3\) のサイト/3](#) で渋沢倉庫本社ビルに渋沢像があることを発見した。本像は、[1\) のサイト/](#) や他の銅像サイトには収録されていない。そこで、私は 3 月 3 日に本像を探索することとした。私は、そのついでに、近くにある中村学園の中村清蔵像も探索した。中村像は [1\) のサイト/](#) に収録されているが、その基本情報が記載されていなかったからである。本稿は両像の探索記である。なお、私の意見などを **青文字** で、資料の内容などを **緑文字** で記載する。

（2）澁澤シティプレイス永代

次ページの図 1 上に、澁澤シティプレイス永代の周辺地図を示す。最寄りの門前仲町駅には、地下鉄東西線と地下鉄大江戸線が乗り入れている。私は、3 月 3 日の朝、いつものように東京都老人パスを利用して、大江戸線で本駅に行った。本駅から徒歩で約 10 分で、澁澤シティプレイス永代（以後、本ビルと書く）に到着した。本ビルの写真を図 1 下に示す。本ビルは 14 階建ての綺麗な建物であった。

本ビルには前庭があり、「**江東区渋沢栄一ゆかりの地**」と題する案内標と、「**澁澤倉庫発祥の地**」と題する掲示板があった。これらの写真を、3 ページの図 2 に示す。これらの説明文は、渋沢像の概要欄に記載する。要するに、当地が渋沢が最初に所有した邸宅跡であり、澁澤倉庫発祥の地である。

（本文は、4 ページに続く。）



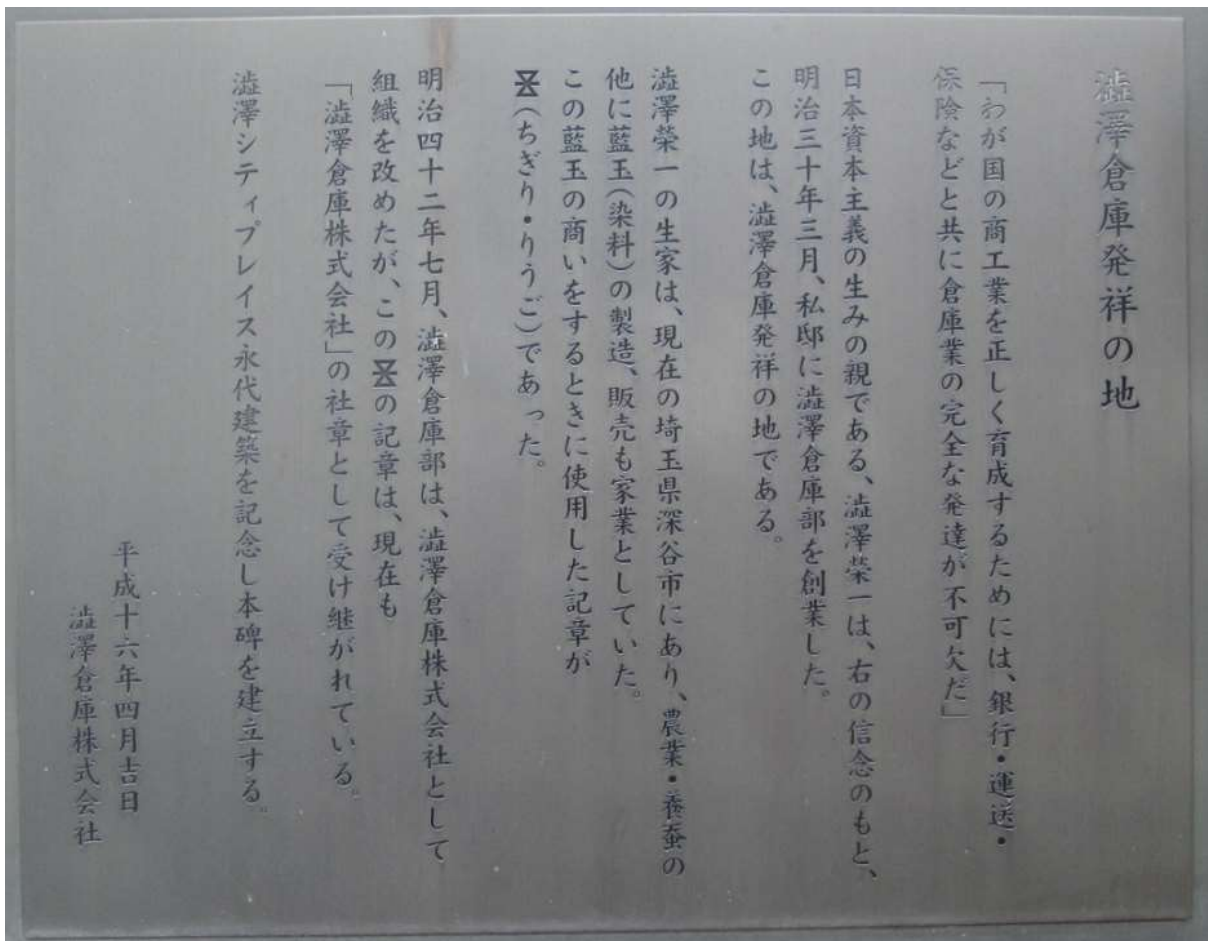
図1. 澁澤シティプレイス永代の周辺地図、本図は、[1\) のサイト/](#)より借用。
下：澁澤シティプレイス永代のビルと前庭。



図2.

上：「江東区渋沢栄一ゆかりの地」と題する案内標、

下：「澁澤倉庫発祥の地」と題する揭示板。



(3) 澁澤シティプレイス永代の渋沢栄一像

[4\) のサイト/1](#) は、本ビルを次のように紹介している。

澁澤栄一が興した「澁澤倉庫部（のちの澁澤倉庫）」発祥の地に、倉庫・物流サービスを展開している澁澤倉庫が賃貸オフィスビルとして本ビルを建設した。竣工年は2004年、高さは14階である。

本ビルを外から見ると、玄関ロビーがガラス越しに見え、内部には1基の胸像が設置されていた。その写真を図3に示す。本像の横には、警備員らしい男性も見えた。私は、本玄関に入って、警備の男性に「銅像の写真を撮らせて下さい」と言った。彼は手慣れた態度で「銅像以外は撮らないで下さい」と許可してくれた。撮影を希望する人が少なくないのであろう。



図3. 本ビルの玄関ロビー

次ページの図4左に、渋沢像を示す。本像台座正面には「青淵澁澤栄一」との題字があった。本像の背面には彫文があった。その写真を図4右も示す。それには、次のように書かれていた。

澁澤倉庫株式会社

発祥地永代に

澁澤シティプレイス永代建築記念

立体写真像 代表者 盛岡公彦作



図4. 左：渋沢栄一胸像、右：本像背面の彫文。

以上の資料などにより、渋沢像の概要は次の通りである。

渋沢栄一胸像

設置場所：東京都江東区永代 2-37-28 澁澤シティプレイス永代玄関ロビー

制作者：盛岡公彦（立体写真像・代表者）

設置時期：2004年4月（澁澤シティプレイス永代建築記念）

設置経緯：

①澁澤シティプレイス永代の前庭にある「江東区渋沢栄一ゆかりの地」と題する案内標に以下の記載がある。


渋沢栄一宅跡：明治9年（1876）4月、栄一は深川福住町の近江屋喜左衛門邸を買い入れ、8月に本拠としました。その後、妻の千代の意見を取り入れ、2代清水喜助に依頼して改築・造作を進めました。明治21年（1888）に栄一が兜町に拠点を移すと長男篤二一家が本

宅としました。明治38年(1905)、篤二が芝区に転宅、本邸移築の後は澁澤倉庫の増築が進められました。現在は、栄一が創業した澁澤倉庫部を前身とする澁澤倉庫株式会社の本社が所在しています。

②澁澤シティプレイス永代の前庭にある「澁澤倉庫発祥の地」と題する掲示板に以下の記載がある。

「わが国の商工業を正しく育成するためには、銀行・運送・保険などと共に倉庫業の完全な発展が不可欠だ」

日本資本主義の生みの親である、澁澤栄一は、右の信念のもと、明治三十年三月、私邸に澁澤倉庫部を創業しました。この地は、澁澤倉庫発祥の地である。

澁澤栄一の生家は、現在の埼玉県深谷市にあり、農業・養蚕の他に藍玉(染料の製造、販売も家業としていた。この藍玉の商いをするときに使用した記章が (ちぎり・りうご)であった。

明治四十二年七月、澁澤倉庫部は、澁澤倉庫株式会社として組織を改めたが、このの記章は、現在も「澁澤倉庫株式会社」の社章として受け継がれている。

澁澤シティプレイス永代建築を記念し本碑を建立する。

平成十六年四月吉日 澁澤倉庫株式会社

(4) 中村学園の中村清蔵像

私は、澁澤シティプレイス永代で洪沢像を探索した後、再び大江戸線に乗り、次の清澄白河駅で降りた。駅の周辺地図を図5に示す。中村学園の中学校・高等学校は駅から歩いて数分であった。本校は閑静な清澄公園の前にあった。

次ページの図6上に、中村学園の正門を示す。門の隙間から1基の銅像が見えた。しかし、流石に女学校! 正門の守りは固かった。私は「これでは、どうしようもない」と思い、探索を諦めかけた。ふと、扉を見ると、「ご用の方は、外の電話をかけて、住所と名前を言って下さい」と書いてあった。私は、「ダメ元」の積りで電話をすると、初老の男性が出て来た。私は彼に銅像の撮影を依頼すると、意外と親切に撮影を許して下さい。感謝、感激であった。(本文は8ページへ)



図5. 清澄白河駅の周辺地図、本図は、[1\)のサイト/](#)より借用。



図6. 上：中村学園正門、下左：中村清蔵像、下右：台座正面の題字。

そのようにして撮影できた胸像を、図6下左に示す。図6下右に示した台座正面の題字には「中村清蔵先生之像」とあった。台座側面には碑文があった。その写真を図7に示す。本文より、本像の設置経緯と制作者の名前がよく分かった。

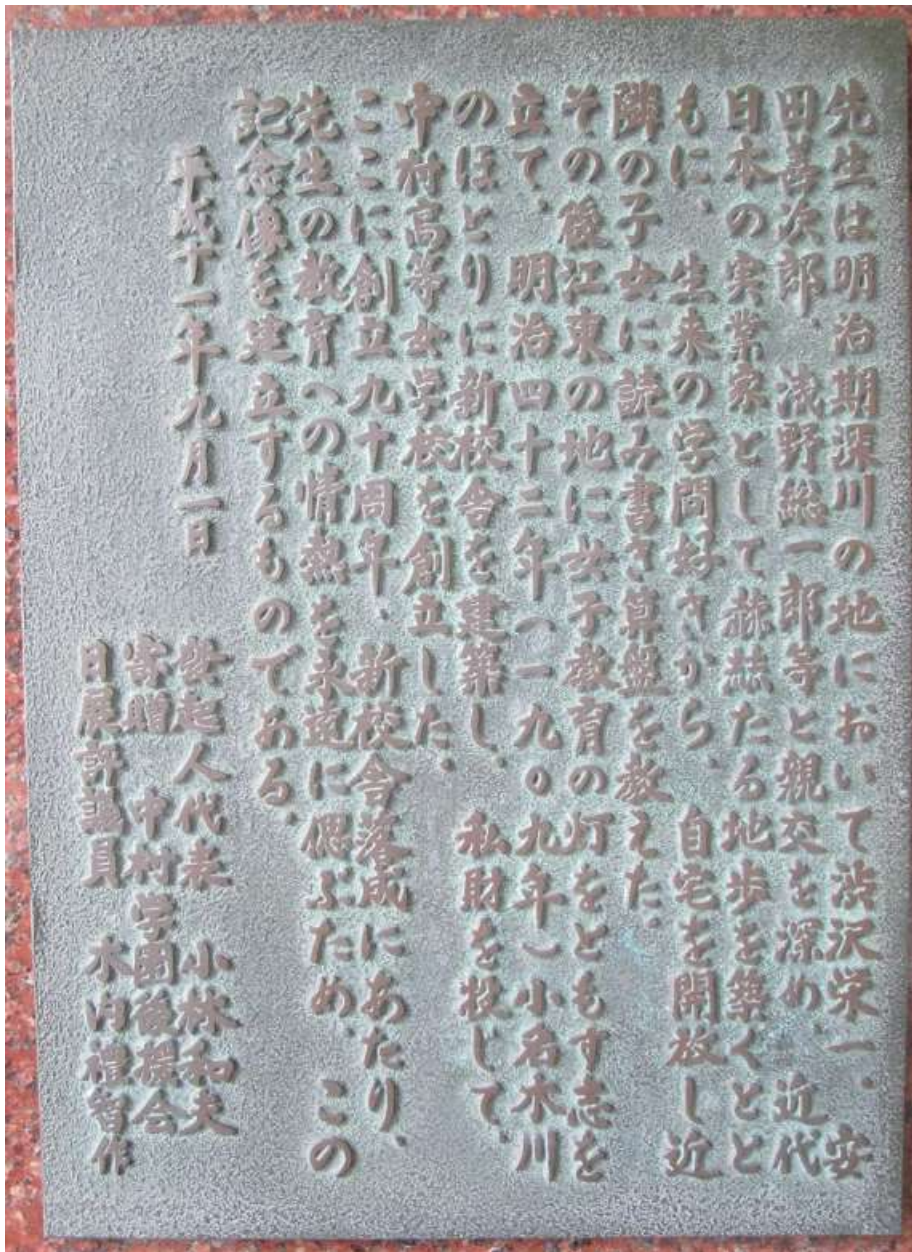


図7. 台座側面には碑文（本文の全文を、本像の概要欄に記載する。）

製作者の木内禮智（きうち・れいち）氏の略歴は、[5\) のサイト/1](#)に記載されている。それを、以下に示す。

1931年 4月：東京都に生まれる

1948年：16歳で千葉県佐原より墨田区緑町へ移転。本籍地とする。

その後 36歳まで居住。墨田区両国高校を経て東京芸術大学入学。現在杉並在住。

1955年 11月：日展初入選。

1956年 3月：東京芸術大学美術学部彫刻科卒業。

1961年4月：仏国政府給費留学。パリ国立美術学校彫刻科入学。
 1964年8月：帰国。
 1965年11月：日展特選。
 1966年11月：日展特選。
 1967年4月：東京家政大学助教授就任。
 1971年4月：日彫大賞受賞。
 1973年11月：日展審査員。
 1974年4月：日展会員。
 1980年4月：東京家政大学教授就任。
 1983年4月：日彫展西望賞受賞。
 1990年4月：日展評議員就任。
 2002年4月：東京家政大学名誉教授就任。

なお、[6\) のサイト/3](#)には、次の記事がある。

令和4年4月11日、木内禮智会員(第3科・彫刻)が逝去されました。

本像の横には、本校の校歌が掲示されていた。その写真を図8に示す。これを作詞したのは、与謝野晶子である。

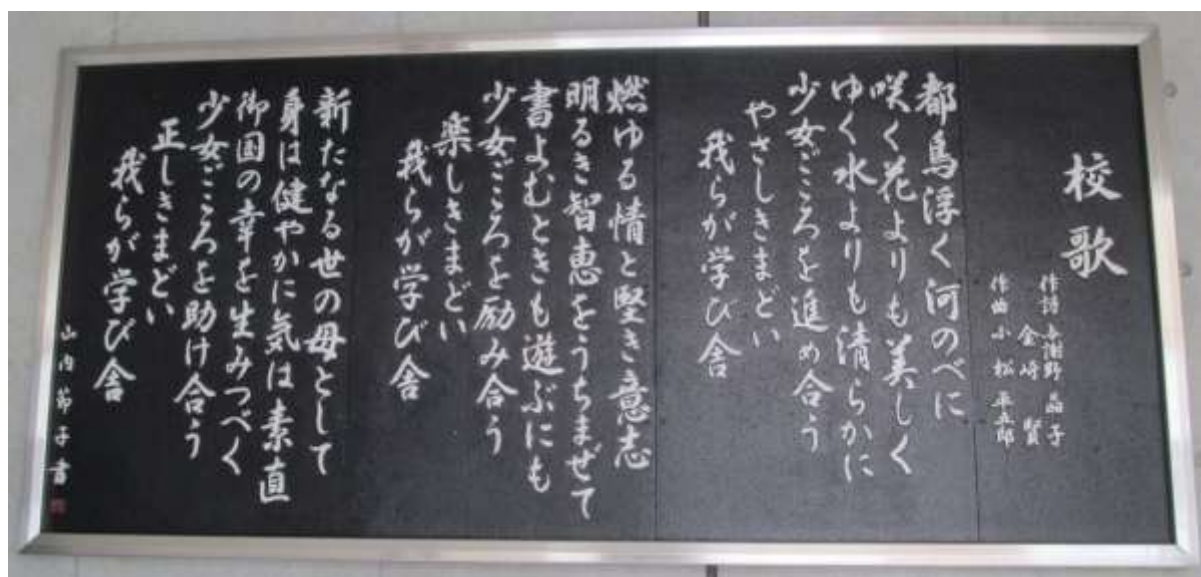


図8. 中村学園の校歌（作詞は与謝野晶子）

ウィキペディアには、「[中村清蔵](#)」の記事はない。しかし、「[江東区中村学園](#)」で検索すると、本校の記事がウィキペディアに記載されている。その中に、「[創設者・中村清蔵](#)」の欄があり、中村先生の経歴が詳しく記載されている。なお、[7\) のサイト/1](#)には、中村学園の沿革や校風が詳しく紹介されている。

以上の資料などにより、中村像の概要は次の通りである。

中村清蔵先生之像

設置場所：東京都江東区清澄 2-3-15 中村学園正門内

制作者：木内禮智（1931－2022、東京家政大学教授）

設置時期：1999年4月1日（創立九十周年記念）

設置経緯：中村清蔵氏（1861－1925）は、明治・大正時代の実業家。旧名は鈴木半次郎。1876年に、日本橋小網町の焼き芋屋から米穀商「上総屋」へと成功した千葉出身の叔父・清右衛門（初代清蔵）の養子となり、「上清（じょうせい）」の名で早くから深川正米市場に進出し米相場で成功し、同市場の有力者となった。1885年に東京市深川区深川佃町で「かねじょうみそ」の名で味噌醸造を始め（のちの日本味噌株式会社）、倉庫業にも進出。1901年中加貯蓄銀行会長、翌年倉庫銀行頭取に就任。1907年頃に正米市場を離れて実業方面に注力し、金城銀行、明治商業銀行、大日本製糖、日本護謨などの重役を務め、深川区議、東京府議も務めた。

本像台座の碑文には、以下の記載がある。

先生は明治期深川の地において渋沢栄一、安田善次郎、浅野総一郎等と親交を深め、近代日本の実業家として赫赫たる地歩を築くとともに、生来の学問好きから、自宅を開放し近隣の子供に読み書き算盤を教えた。

その後江東の地に女子教育の灯をともし志を立て、明治四十二年（1909年）小名木川のほとりに新校舎を建築し、私財を投じて、中村高等女学校を創立した。

ここに創立九十周年、新校舎落成にあたり、先生の教育への情熱を永遠に偲ぶため、この記念像を建立するものである。

平成十一年九月一日

発起人代表 小林和夫 寄贈 中村学園後援会 日展評議員 木内禮智作

参考資料

- 1) のサイト：<https://douzou.guidebook.jp/>
- 2) のサイト：<http://masaniwa.web.fc2.com/Ranpo.pdf>
- 3) のサイト：
<https://www.facebook.com/photo.php?fbid=10215044159479502&set=p.10215044159479502&type=3>
- 4) のサイト：<https://bb-building.net/tokyo/deta/354.html>
- 5) のサイト：https://katsu-kaisyu.net/kikuti_syoukai.html
- 6) のサイト：<https://nitten.or.jp/news/news-1063263>
- 7) のサイト：<https://nakamura.ed.jp/outline/about.html>